書評

遠藤泰生編『反米―共生の代償か、闘争の胎動か』

（東京大学出版会、2021 年）

石　原　　剛

ウクライナ市民の頭上に無差別に降り注ぐロケット弾、大国ロシアによるウクライナ市民虐殺の惨状、第二次大戦の反省を踏まえて構築されたはずの国連安保理の機能不全。大国によるあからさまな侵略という、時計の針を半世紀以上も逆戻りさせてしまったかのような状況にある今、ウクライナ侵攻の惨禍を想起せずに本書『反米』の副題「共生の代償か、闘争の胎動か」という問題を考えることはできない。今なお戦渦で失われ続けているウクライナ市民の命はウクライナがアメリカを中心とした西側陣営との「共生」の道を選んだゆえの「代償」かもしれないし、ロシアにしてみればウクライナに対する今回の蛮行は、今後長く続くかもしれない新冷戦という「闘争」の「胎動」なのかもしれない。このような複雑さを増す世界情勢の中、本書が問いかけてくる「反米」の問題は自ずと複雑な意味合いを帯びてくる。

そもそも、本書のテーマであるアメリカ自体が民主主義国家の盟主を自認しながら、国内外で民主主義の根本理念を裏切り続けてきたことは多くが認めるところである。本書に収録された複数の論考、なかでもメキシコ、キューバ、ロシア、日本における反米の問題に切り込んだ論考に特に明らかなように、人権や各国の事情を明らかに軽視した（あるいは無視した）独善的なアメリカの姿勢が様々な形で反米の動きにつながってきた。例えば、第 6 章で詳らかにされるキューバ独立運動家ホセ・マルティによる反米、特に移民としての実体験に根ざした労働者に対する搾取、拝金主義への批判を基盤とした反米意識などは、多くが共感できる類いの反米といえよう。

「親米」を信奉するには、自分はアメリカをあまりにも学び過ぎてしまったことは確かだが、その一方で、日米安保体制という国家主権の維持がアメリカの国力に相当程度依存した体制下で、まずは戦争のない世の中を享受している日本という国に生きてきた自らの心の深奥には、「反米」という姿勢に留保なく身を委ねることに対しても躊躇を覚えるもう一人の自分がいる。「反米」という言葉が明示する「アメリカに反対する」という姿勢をとることに対するある種のうしろめたさ。反米について考えれば考えるほど、自らの平穏な日常があまりにアメリカに依存してしまっていることに気づかされ、超大国アメリカなき後の世界で生きることへの恐怖の感情が首をもたげてくる。

しかし、そのようないわばアメリカに甘えた状態に安穏として「反米」の問題を遠ざけ続けることは、少なくとも日本という国でアメリカを研究することを生業にする人間の一人として誠実な態度といえないだろう。世界には、アメリカが超大国であることで強い恐怖を抱いている国々が少なからず存在する。そういった国々が次々と上げる反米の声をあたかも遠くのスタジアムから聞こえてくる歓声程度にしか認識しないとしたら、反米

の問題は永遠に他人事として理解の埒外におかれ続けるに違いない。その意味で、本書にキューバ、ロシア、中国といった旧東側諸国の反米を論じた章がしっかりと存在感を放っていることはありがたい。加えて本書には、西側とは異なるメキシコ、さらにヨーロッパ諸国や日本といった西側が発する反米の声に関する章も充実しており、反米の問題を地球規模で相対化して理解するうえで極めて有益である。以下、各章の内容を検討していく。

本書の編著者である遠藤泰生は、元々、比較文学比較文化を専攻した研究者であり、多国間の比較を重視する姿勢は、同氏の「序章」においても際立っている。「反米」という言葉の語義を考える際も、一国の辞書によるのではなく、様々な国の辞書を参照することで、「反米」という言葉の拡がりについて考えていく。例えば、ロシア。かつての米ソ冷戦、今日の米ロ対立の文脈から考えれば、「反米」という言葉の氾濫を真っ先に想像してしまうが、実は、21 世紀に至るまでいかなる主要なロシア語辞典にも英語の“anti-Americanism”に相当する言葉がなかったという事実が指摘される（6）。無論、政治レベルでの米ロの対立の溝は深い。しかし通常、辞書に言葉が採用されるには広く人々に共有されることが必要であり、ロシア語辞典における「反米」の不在は、ロシアの市井の人々がアメリカへの反感を網羅的に表現する必要性をそれほど強く感じていなかった可能性も示唆する。無論、これは筆者による推測の域を出ないが、こういったロシアにおける「言葉」のレベルでの「反米」の不在は、第 8 章で安岡治子が言及した、ソ連崩壊時における国民レベルでのアメリカへの期待や憧れの強さにも通ずる。政治上の敵対関係が広く一般の意識にそのまま共有されていると考えることの危うさを想起させる。

加えて読者にとって有益なのは、反米の諸特徴として 7 つの要素が「序章」で整理されていることだ。ここでその全てを挙げることは避けるが、中でも重要と思われるのは、第 5 の特徴「反米と親米は同時に存在し得る」（19）と、第 7 の特徴「世界の反米に対するアメリカ側の無理解」（20）である。第 5 の特徴、すなわち反米と親米の共存性は、特に超大国アメリカの力に相当程度依存することで平和を享受してきた多くの人々の内面に巣くう矛盾をも言い当てているように思われる。冒頭で述べた反米的立場を一方的にとることに対する筆者のアンヴィヴァレントな思いに通じる特徴だ。また、第 7 の特徴、すなわち他国の事情を軽視したアメリカの独善性は、第 1 章で扱われるウィルソン外交が引き起こしたメキシコでの反米の根幹にある問題を言い当てているし、昨今の例で言えば、アメリカが民主主義の浸透を掲げて介入したイラクにおける反米についても相当程度あてはまる特徴であろう。編著者が示唆するように「アメリカが大国であること自体に反米に耳を傾けられない構造が最初から埋め込まれている」（21）のだとしたら、超大国アメリカの国力に依存している日本のような国は、その独善性をあらかじめ織り込んだうえでこの大国とつきあわざるを得ないということになるのだろう。加えて、同盟国である日本が、アメリカが自覚し難い独善的な姿勢にどれだけの気づきを与えることができるのか、といった問題も同時に問われているような気がする。

本書は 4 部構成、全 9 章から成る。第 1 部「二国間関係の中の反米」で扱われるのはメキシコ、キューバ、中国における反米である。

第 1 章の西崎文子による「介入と反米―ウィルソン外交とメキシコ」では、高邁な理想・理念を掲げたウッドロウ・ウィルソンのメキシコ政策が、やがて自国アメリカの利益の追求を目指した独善的な押しつけ外交に走り、メキシコ側の深い失望と反米感情を生み

出していく過程が鮮やかに描き出される。全体主義や権威主義を標榜する国家が覇権的な動きを強めている今日にあって、依然アメリカに自由や民主主義の旗振り役を期待する声は大きい。しかし、崇高な理想も、他国が抱える現実への理解が乏しいまま一方的に押しつけられれば、かえって反発の火種となり易い。他国が自発的に自由や民主主義を選び取っていくような環境の構築を価値観の押しつけに走ることなくいかに後押しするか、現実に根ざした巧みでしたたかな外交の必要性を西崎の論考を読んで強く認識させられた。

続く第 2 章は、高橋均による「キューバと「反米」」である。本章では、野球の普及に代表されるように、権威主義的な宗主国スペインに対する嫌悪感の裏返しとして、アメリカの自由や豊かな経済への憧憬が広くキューバの人々に共有されていたことがまず確認される。そのうえで、なぜ親米の要素を多分に有していたキューバが革命後、反米路線を長く維持することが可能となったのかを問う。この問いに対して高橋は明確な回答を示す。すなわち、「「親米」の部分だけがアメリカに引っ越したのである」（89）と。つまり、本来、反米政権に対峙すべきリベラル派や中間層がアメリカへと万単位で脱出してしまったことが、反米政権の体制維持を実現してしまった、と結論づけるのだ。このくだりを読んで筆者の脳裏に浮かんだのは、やはり昨今のロシアによるウクライナ侵攻をめぐる景色であった。具体的には、反米を掲げるプーチン政権の圧制や徴兵から逃れるために大挙して国外へと脱出するリベラル派のロシア人やロシアの若者たちの姿だ。自国に留まれば、収監か戦場か、最悪の場合は処刑かといった中で祖国を後にする大量のロシア人たち。キューバの歴史をそのまま今日のロシアのケースに適用することなどできないと頭では分かりながらも、リベラル派に見限られたロシアで、さらに純化された反米が立ち現れることはないと誰が断言できよう。世界の分断のメカニズムの一端を実例と伴に指し示す意義深い論考であった。

続く、第 3 章の村田雄二郎による「近現代中国における「反米」と「親米」―対立と競存の構造」も示唆に富む。村田は、「反復される構造」としての反米や反米主義が近現代の中国において希薄である点を強調する（91）。中国ナショナリズムと結びつく形で「反米」が唱えられることはあっても、「反日」と異なり「反米」には歴史的トラウマが希薄なために中長期的に持続しうる態度とは成りにくい（113）。米中対立が激しさを増す今日にあって、本章が明らかにするような中国における反米主義の希薄さや親米的伝統については、なかなか目が向きにくい。無論、現実政治、特に外交において甘い楽観論は禁物とはいえ、こういった中国に長く存在していた親米の流れを見ることなく、「中国は反米である」と一方的な決めつけの下で米中関係を考えることは、米中関係の歴史が積み上げてきた有効なツールを自ら放棄してしまうようなものだろう。米中関係が袋小路に入って身動きがとれなくなっているように見える昨今、本章から得られる展望は少なくない。

第 2 部「冷戦と反米」は、1950 年代の冷戦を背景とした反米の諸相を特に作家や知識人に注目して論じる 2 つの章から成る。舞台は冷戦下の日本とイギリスである。

第 4 章の金志映による「火野葦平の冷戦紀行と「アメリカ」―『赤い国の旅人』と『アメリカ探検記』の狭間からみる親米／反米」では、火野の戦後の文章を中心に、敗戦国日本が受容したアメリカに対する複雑な心のひだの有り様が考察の対象となる。その際、金が強調するのは、日米の二国間関係の枠組みを越えて、広くアジア・太平洋も含めた冷戦の力学を視野に収めることである（120）。火野は戦後、中ソの共産主義の専制に対して

批判的な立場を表明していたこともあり、アメリカ側からの好意的な受けとめの下、訪米の機会を得る。要はアメリカ側にしてみれば、冷戦下の文化外交に火野を利用しようとしたわけだが、当の火野はアメリカの文化外交に取り込まれる気などさらさらない。金の論考を読んで筆者が興味深いと感じたのは、火野が中国訪問の際に感じたような中国民衆に対する後ろめたさを、アメリカでは微塵も感じていないように少なくとも見えることだ。金も示唆するように、中国では、かつての侵略の罪の意識におののく加害者としての火野の姿が垣間見える（129–30）。一方、占領期の GHQ による検閲から解放されたということもあるのだろうか、オキナワ、ヒロシマ、ナガサキの惨状をもたらした圧倒的強者のアメリカに対しては、過激ともいえるほどの自由な筆使いが火野の文章には感じられる。そのことは何よりも、ニューヨークを訪れた火野が、単なる夢想とはいえ、このアメリカ最大の都市の頭上に「一発の原子爆弾か水素爆弾かを落としてみたい危険な衝動にしきりに駆られた」（136）という火野の言葉に凝縮している。筆者はそこに、多くの日本人が共有するアメリカに対する独善的ともいえる被害者意識の影を見るような気がする。この無責任極まりない火野の言葉が一体どのような対米意識の下で発せられているのか。そして、同様の対米意識はどれだけ広く戦後の日本人の中に共有されていたのか、更なる問題へと導いてくれる刺激に満ちた論考であった。

続く第 5 章は、小川浩之による「「反米」の代償―オーウェル、カーと同時代のイギリス知識人を通して」である。冷戦期において、米ソとは一線を画する第三の中道路線を標榜した英国の知識人 E・H・カーの運命が丁寧に辿られる。アメリカの同盟国イギリスにおいて、冷戦下の激しいイデオロギー対立の中「反米派」と目されることが孕む複雑な意味合いを、特にカーに対する不当ともとれるオックスブリッジの扱いに注目して分析が為される。本来、政治から自立した「学の独立」が保障されるべき学術界においても、アメリカ一極支配の力学が微妙に影を落としていた状況には、筆者も大学に籍をおく人間の一人として正直驚かされる。同盟国であっても非対称の力関係にあるアメリカとの二国間関係においては、公正さが力によって蹂躙される場面が生れてしまう現実。同じく非対称な二国間関係といえる日米関係においても、基地問題を筆頭に同様の例は数多くあるに違いない。少なくとも、どのような政治状況においても、政治からの学の自由を保障することがいかに重要であるか、根本的な問いを投げかける非常に示唆的な論考であった。

第 3 部「憧憬と反発、驚異と脅威」には、文人やジャーナリストたちの言葉に寄り添った 2 つの章が収められている。ここで検討されるのは、怖れながら憧れ、憧れながら怖れる対象であったアメリカに対する作家や知識人の思いである。

第 6 章の竹村文彦「怪物の内臓を腑分けする―キューバの独立運動家ホセ・マルティの「反米」」では、19 世紀期末のニューヨークのスラム街に移民として生きたマルティによる、実感を伴ったアメリカ社会への印象が綴られる。その文章は、ちょうど同じ頃に写真家のジェイコブ・リースが名著『向こう半分の人々の暮らし』（1890 年）で生々しい写真とともに紹介したニューヨークのスラム街の惨状を彷彿とさせる。マルティは当初、アメリカの科学技術や自由、民主主義に憧れながらも、搾取、貧困、物質主義、享楽主義が蔓延り、民主主義の歯止めを失って苛烈な富への欲望が支配するアメリカに幻滅を深め、反米へと傾いていく。そして、アメリカとは対極のラテンアメリカの伝統文化や精神世界を賞揚することで、同世界のアメリカからの決別を唱導するのである。キューバ独立の闘士

マルティのその後の活躍を考えれば、移民の期待を裏切り続けることが、周り巡って自国の利益を損なうことにまで繋がりかねないという事実を、本論考は如実に教えてくれる。人としての最低限の扱いもされずにアメリカから放り出される現代の多くの移民達の胸に「反米」の二文字が深く刻まれたとしても不思議ではあるまい。

第 7 章、菅原克也の「脅威と驚異としてのアメリカ―日本の知識人・文学者の戦中日記から」が注目するのは、敵国アメリカに対して怖れながら憧れるという、第二次大戦下にある日本人の屈折した感情である。例えば、「日本人の精神力」対「アメリカの物質文化」という二項対立的な観点から「巨大な殺戮機械としてのアメリカ」（219）のイメージを胸に描いた伊藤整のような作家もいれば、むしろそのアメリカの殺戮機械の象徴である B29 の姿を「美しい」と書き留める清沢洌や高見順、大佛次郎や矢内原忠雄のような日本人もいたことが紹介される。手の届かない高空を悠々と飛ぶアメリカの象徴 B29 を「美しい」と感じるような憧れにも似た感情。菅原が紹介する戦中の作家や知識人たちのこういったアメリカへの眼差しは、戦後の日本にも形を変えて引き継がれた感覚だったのかもしれない。かつて常磐新平は自伝的小説『遠いアメリカ』（1986）で、戦後 10 年を経てもなお手の届かないアメリカ文化に憧れつつ悶々とした日々を送る青年を描いた。遠いからこそワンダフルな（「驚異」に満ちた）対象として、アメリカが日本人の心の中に刻まれていく。編著者の遠藤が「終章」で驚きとともに報告したように、アメリカが限りなく近くなっているように見える 21 世紀の今日においてもアメリカへの手放しの憧れを表現する日本人の若者は多い。今もアメリカは、多くの日本人にとって「遠いアメリカ」のままなのかもしれない。

第 4 部「理念のアメリカと反米」は、そういった現実離れしたアメリカ観の背後に必ずと言ってよいほど存在する「理念としてのアメリカ」を巡る反米と親米が問題の核心となっている。ここで扱われるのは、ロシアとヨーロッパにおけるアメリカ観である。

安岡治子による第 8 章「ロシアの「反米」―独自の道を求めて」を一読して思うのは、ロシアにおける反米を一方的にロシアの責任に帰することがいかに馬鹿げているかといったことである。ソ連の崩壊で高まったアメリカの豊かさや繁栄への憧れが、アメリカからの有効な支援もないまま 1990 年代には早々と裏切られ、アメリカニズムの象徴である自由や民主主義や市場経済への疑念の高まりとともにアメリカ主導の NATO 東方拡大などに自尊心を傷つけられたロシアは、1990 年代後半には新ユーラシア主義に根ざした反米へと傾くようになった。安岡が照射するのは、19 世紀のドストエフスキーや 20 世紀前半に活躍したガステフ、エセーニン、マヤコフスキーといった詩人に加え、SF 作家のプラトーノフ、20 世紀後半の作家ソルジェニーツィンといった作家や知識人が展開した 150 年にも亘るロシアにおけるアメリカ観の展開である。ロシアに連綿と続く特性として安岡が結論部で強調するのは「他者との強い共同体的感性」（260）である。アメリカがいかに個人主義や新自由主義的価値観を振りかざしても、ロシアの特性と相容れない価値観の押しつけは、第 1 章のメキシコにおけるウィルソン外交の失敗でも明らかなように、かえってロシアからの反発を引き起こすだけである。ロシアによるウクライナ侵攻でロシア批判が鋭さを増しているように見えるが、アメリカを筆頭に世界において分断や格差の問題が深刻度を増している今日、他者や共同体を重視するロシアの伝統から学ぶことも少なくあるまい。敵国を悪魔化するのは戦争の常ではあるが、そういう時だからこそロシアの特性

を冷静に受け止める姿勢が益々重要になってこよう。

一方、ロブ・クルス（鰐淵秀一訳）による第9章「アメリカの大衆文化とヨーロッパの若者文化」で扱われるのは、ヨーロッパの若者を中心としたアメリカ大衆文化の大胆ともいえる同化・吸収の姿である。ヨーロッパの若者たちは、伝統文化に対する反抗の印としてアメリカ文化を受容し、共通の「文化的記憶」として自らのものとしてきた（254–75）。しかし、ヨーロッパの人々は単にアメリカ文化をそのまま受容してきたわけではない。必要に応じて作り替え、みずからが求めるアメリカ像にあわせる形でアメリカ文化を受容してきたのである。その際、強調されたのはアメリカが喚起する自由のイメージである。そのことを最も象徴するのが、クルスが最後に紹介するアメリカのジーンズの老舗リーバイスのオランダでの宣伝だ（298）。「運動の自由」というコピーとともにジーンズの下にある勃起した男性器の膨らみがあからさまに描かれるその宣伝ポスターは、クルスのいうようにアメリカ本国では恐らく許されない程の「自由」を与えられている。クルスの論考が例示するように、アメリカ文化に限らず、他国の文化への憧れが、場合によってはいびつな形の文化受容をもたらす例は世界中にあふれている。かつての日本の例を挙げれば、「フジヤマ・ゲイシャ」に代表される日本イメージがことさらに強調され、19世紀末から20世紀初頭に西洋で花開いたジャポニズム小説では、判を押したように、男の帰りを待つゲイシャガールのキャラクターが氾濫していた。このように国境を越えた異文化のやりとりは予期せぬ「いびつさ」を伴うことが多いとはいえ、他国の文化に自国の文化にはない新鮮な「何か」を希求する姿勢は少なくとも多極的な価値に自らを開いていこうという態度が基盤となっている。むしろ問題化されるべきは、文化のグローバル化に対抗する形で、独善主義的に自国文化を賞揚するような内向きの動きであろう。愛国心を醸成する道具として国家が賞揚する文化もまた「いびつ」に純化されることが多いだけでなく、他国の文化に対する否定や優越感へとつながることが多い。オランダのリーバイスが表現する膨らみは「いびつ」であることは間違いないが、別種の「いびつさ」にも我々は目を光らせる必要があるように思われる。

以上9章からなる本書の結びとなるのが、編著者の遠藤による終章「踊る若者たちのアメリカを思いながら」である。ここでは、アメリカを長きにわたって考え続けてきた遠藤のパーソナルな経験から反米の問題が綴られている。中でも筆者にとって興味深かったのは、半世紀以上前のアメリカ文化への憧憬をストレートに表現するポップミュージック（DA PUMPの『USA』）に魅了される日本の若者たちの姿を、遠藤が大きな驚きをもって報告している点である（304–305）。遠藤の驚きに共感しつつ、1990年代に大学生活を送った自らの身に思いを馳せてしまった。そこで立ち現れたのは、今日の若者、いやそれ以上に脳天気にアメリカ文化を受容していた「自分」である。ヴェトナムの悲劇が歌詞に濃厚に織り込まれたブルース・スプリングスティーンの「ボーン・イン・ザ・USA」を、意味も分からずに愛国的な曲と勘違いし、アメリカ文化はクールだとお目出度い感想に浸っていた大学生の自分。今の大学生は、そこまでのお目出度さはないかしれないが、深く考えずにアメリカに憧れの眼差しを向ける若者は今も意外に多いのかもしれない。であるならば、アメリカはいまだに遠い。その「遠いアメリカ」の実態を、極端な反米や極端な親米といった皮相的な理解に陥らせることなく、若い人たちにどのように伝えていけばよいのか。そこで参考になるのが、編著者の遠藤と各章の論者が本書で実践している態度

であろう。アメリカを語る自らが一方的な反米や親米にとらわれることなく、遠景と近景の両方を大切にしながら歴史的な理解に立って冷静にアメリカを巡る動きや言説を観察し伝えること。そういった姿勢に立ってこそ、短期的な感情論や思考停止に陥りがちな反米（や親米）の問題の本質をすくい上げることができるのであろう。その意味で本書は、反米の問題はいうまでもなく、筆者が今後アメリカを語り続けていくうえで大いに参考になる内容であった。同書がアメリカ研究の名著として広くそして長く読み継がれていくことを願ってやまない。